

9. cats the story

敦賀市立中郷小学校

6年 高木 日和 田代 千佳

↓

各務原市立那加第三小学校

6年 竹内 梨乃 水口 笑菜 加藤 由希子

私は^{りお}里桜。もうすぐ中学受験。そんなに頭はよくないけど、お母さんが進学校に申し込んじゃって、すっごく勉強中。

「里桜！ ちゃんと勉強しているでしょうね」

お母さんがシュークリームとオレンジジュースをもってきた。私、甘いものは大好きだから。でも、お母さんは私に期待しているから、返事もしないで問題集を解く。もちろんシュークリームも食べない。ベッドにはネコののん（メス）とゆき（オス）がねている。

「……じゃあ、がんばってね」

お母さんは、部屋から出て行った。ベッドにはシュークリームがひとつくろ置いてあった。となりのネコたちを見て私はぼそりつつぶやく。

「いいなあー。ねこは気楽で。私もねこになりたいな」

なんて言っていないで、さっさと勉強しないと。

そのとき、ねこののんがしゃべった。

「あなた、ねこになりたいの？ なら、どうぞ」

いきなり目の前が真っ暗になった。

……あれ？ なんか私へん！ 部屋が大きく見える……。気のせいよね……。ええっ！ 私の前に、ネコの手がどどっーんと！

私はおそろおそろ部屋の鏡を見た……！？ そうしたら、鏡に白いネコが映った。夢よね……。一度目を閉じてから、もう一度開いてみても、鏡に映るのは、白いネコ。私は何があったのか思い出してみることにした。ベッドの上で眠っていたのんとゆきにむかってひとりごとを言ったのよね。

「私もねこになりたいなあ」

って。そうしたらのんが、

「あなた、ねこになりたいの？ なら、どうぞ」

ってしゃべって……。えっ、ネコがしゃべって……ってことは、もしかして私ネコになっちゃったの。どうしよう。そんなつもりで言ったわけじゃなかったのに大変なことになっちゃった。早く人間に戻してもらわないと困っちゃう。

あせって振り返ると、のんがベッドの上から床へおりて私のそばへやって来るところだった。私はのんのそばへかけより、

「のん、早く元の人間の姿に戻して！」

すると、のんはすました顔で、
「いやよ。だって、あなたネコになりたいって言うていたでしょ」
と答えた。私は小さな声で、
「うん、まあ……」
と次の言葉を続けられずにいると、のんはつんと顔を上に向けて、
「それに、ネコって結構大変なのよ。あなたはネコの大変さを知らないから、私があなたをネコに変えたのよ、魔法の力でね」

「えっ、魔法で！」
トン、トン、トン。誰かが階段を上る音が聞こえる。やだ！ お母さんが部屋へやって来る。

ガチャ。
「里桜？……どこへ行ったのかしら。勉強の途中なのに。あら、見たことのないけど、綺麗なネコね。こっちへいらっしゃい。ミルクをあげるわ」

どうしよう。こんなところで里桜に戻ったら、お母さんに怒られる。いいえ、驚きのあまり腰を抜かして気絶するかも。

うろたえている私にはお構いなくお母さんは私を抱き上げて、
「かわいいわ。そうねえ、あなたの名前は……サクラ、サクラよ」
……サクラ！ 私の名前の里桜の桜だ！

お母さんは私を連れてキッチンへ行き、歌を歌いながらミルクを温めはじめた。
ほっ、ばれなくて良かった。ネコの間はのんびりと過ごすことができるわ。あっ、でも受験勉強……。まっ、今はネコなんだしいいよね。のんびりすれば。

お母さんにミルクをもらった。あーあ、やっぱりさっきのシュークリーム、食べておけば良かった。でも、ミルクは甘くて温かかったな。

お腹がいっぱいになって眠くなったことだし、二階に戻って寝よう。のんびりネコ life の始まりだ！

そう思ったけど、ここから二階に行くのよね。階段は私の目より上にあるし、部屋のベッドは階段を一段一段上るよりも、もっと上！ あー、もうっ……。

結局、ベッドの上へたどりつくまでに一時間以上かかった。ばふっ、ふとんの上に倒れ込む。

目を覚ますと、あたたかいガーデンにいた。
「里桜よ……、ネコの姿になってどうだ？」
私は眠い目をこすりながら声の方に向かって答える。
「えっ、そりゃあもう、サイコー。のんびりできるし、受験の心配もしなくていいしね。でも、ちょっと大変なこともあるかな」
「そうか、まだ、ネコの大変さが分かっていないようだな。それなら野良猫になってみるか……よし、そうしよう。えいっ」

「えっ！」
また、目の前が真っ暗になった。
ううっ、寒い。ここはどこだろう。ええっ？ 知らない人間が歩いている。それも背

が高い。上を見ると建物まで……って事は、ここはさっきまでいた私の部屋ではなくって外の世界！ と思ったその時、グーとお腹が鳴った。

(そういえば私、お昼から何も食べていない。やっぱりミルクだけじゃあ……)

とっていると、どこからともなく、いいにおいがしてきた。

これは……魚！ しかも焼魚のにおい、おいしそう。食べたいなあ。よし、その魚をもらってこよう。だめかな？ 人間だったらだめなんだけど、今の私はネコなんだし、事情を説明することもできないしね。

においのする方へ歩いていくと大きなネコの影が見えた。焼魚を持っていたのはこのネコだ。私は後ろからおそるおそる声をかけてみた。

「ねえ、ちょっと」

すると大きなネコは、くるっとこちらを向いて言った。

「俺の名はクロラ。さっきのあの声の主はハインズ。大魔法使いだぞ」

「ふ、ふーん……。私はサクラ。それちょうだい。私、ちょーお腹空いてるの」

クロラは無言で魚の頭の部分を差し出した。一口かじってみる。苦い……。でも、食べた。

「食べ終わったか、ならさっさと行くぞ！ ハインズのところへ！」

そう言うとクロラは走っていった。

え～、何で行かなきゃいけないの。めんどくさーい。でもまあ、魚を分けてくれたことだし、他に行くあてもないし、仕方がない。

クロラはいっさい手加減しない。速度をおとすことはなかった。私も一生懸命ついて行った。でも力尽きた。

「サ・ク・ラ！ お・き・ろ！」

私は倒れてしまったらしく、しばらく休むことになった。ネコであることはつらいなあ……。でも、人間に戻るなんて願い下げよ！

まだこの時、私はよく考えてなかった。でも倒れた私を見ているクロラの肉球に刻まれた Death という文字からは何かを感じた。Death の意味を私は知らなかったけど。

まさかそれが、死という意味だなんて……。★

私達はしばらくして、走りはじめた。すると、ビルとビルの間を通りぬけていくたび、すれちがうのらねこの数がふえていく。一ぴきのネコがクロラにあいさつをした。

(えっ?)

だけど、深く理由はきかなかった。

先の方に、まるでクロラを待っていたかのようにたくさんのネコがいた。クロラが振り返っていった。

「俺達の仲間にならないか？ ほら、みんなをみてみる。幸せな顔してるぜ」

(えっ?)

言ったつもりだけどでなかった。

「おい、クロラ。そんなむりやりはだめだ」

別のネコが来て言った。

「いきなり悪いな。俺はハインズ。こう見えても、大魔法使いなんだ」

ちょっとたってから、また話し出した。

「ここでちょっくら、この世界のことを紹介してやるよ。ここは捨てられたネコが集まる場所だ。まあ、俺が拾ってやったみたいなもんだけどな」

私は頭の中で言葉がクルクル回っていた。

「この中では、魔法が使えるのは俺だけだ」

「じゃあ、のんは？」

「のん？ ああ、ノアリンのことか。あいつは……」

「出てったと」

クロウが口をはさんだ。

「おい！！」

そう言ったハインズの顔は、さっきより増してこわかった。

「分かった。すまねえ」

おびえるような声でクロウが言った。

「まあ、あいつのことは、お前が仲間になってからだ」

次はクロウが言う。

「さあ、仲間になる気になったか？」

「で、でも、そうしたら家に帰れなくなるんでしょ？」

「お前はのらねこだ。家なんか無いんだろ？」

「でも……、そうだけど、自分が落ちつく場所ってあるじゃん？（汗）だから、その、えっと……」

私は、あせりながらもそう言った。

「それって、俺たちの仲間に入りたくないってことか？」

「そっ、そーかも……」

「なんだとお！！」

私は思わず体がふるえた。それほどのこわさだった。

「ハッハッハッー」

ハインズがいきなり笑いだした。それにもビックリした。

「今までに俺らのさそいを断ったやつは、お前がはじめてだ」

まだ笑いながら言ってる。

でも、さっきの言葉はちょっとうれしかった。

「うっ、うう……」

私は目を覚ました。

「いっ、痛い」

「やっと目を覚ましたか」

「ハインズ！？」

目がクラクラしててよく見えない。だんだん見えてくると、みんなが私を囲んでじーっと見ていた。

（こっ、こわい……。そうだ、私）

「なぐられたんだ！」

思わず声が出てしまった。体中がギシギシとしめつけられているように痛い。とにかく、痛い。体を見ると、キズだらけだ。

「どうだ、俺達の強さが分かったか？ 仲間になる方が身のためだぞ。さあ、入るんだ」

(今が、勉強ばかりさせられていた自分を変えるチャンスだ。でっ、でも……)

「決意はできたか？ みんな、おまえが入るのを楽しみにしてるんだぜ」

「そうだ！ そうだ！」

他のネコたちにせまられるように言われた。

「さて、さて～」

(はっ、はやくにげないと、みんなに……。みんながきた。もうこうするしかない)

近くの屋根に登ってなんとかかかくれた。他のネコはみんな通り過ぎたけど、ハインズだけは通り過ぎなかった。ハインズがなにかやってる。目の前が真っ白になった。

「キャー」

自分の体が空高く浮び上がった。

ハインズがニッと笑う姿を見て思わず、ニッと返してしまった。

今度は勢いよく下に落ちていった。

(あれ？ 痛くない。私、浮いてるんだ)

そしたら、ゆっくりと足が地面につく。

(ここ、なんか見たことある。そうか、ハインズたちの基地だ)

「おまえを傷つけるわけにはいかないからな。さっきの暴力は別だ、別」

またみんなに囲まれた。

ハインズがまた話し始めた。

「仲間になるのは、そんなに嫌か？」

「くすんっ、くすんっ (涙)」

私は家族のことを思い出して涙が出てきた。

「俺は悪くねえよなあ、なっ、なっ、なっ？」

ハインズはみんなに確かめるようにいった。まわりのみんなが目をそらしながらはなれた。

「なっ、なんだよ。みんな、俺を誰だと思ってるんだ！」

目の前が真っ白になった。あの時と同じだ。

「ニャ～！ ニャ～！」

他のネコ達が全員わめきだした。

「そうだ！ 俺、もとは人間だ」

「私も！」

(えっ)

「俺達みんな、ハインズにネコに変えられてここにいるんだ」

また目の前が真っ白になった。

(みっ、みんなが……。人間の姿に！?)

「俺達は人間だ！」

「やったー。私も人間に……。あれ……。戻ってない……」

「ハッハッハー。お前は俺が変えたわけじゃないからな。戻れないのも当然だ。まあ、

こいつらを人間に戻しちまったのは、おしかったがな」

「ちょっとまって。俺って……ハインズ！ お前が変えたのか？ あのノアリンってやつが変えたんじゃないのか？」

ガンガンドーン！！

大きな音がした。そしたらドカンとか、色々な物といっしょにネコが落ちてきた。あのネコは……のん！？

私に考えるスキをあたえないくらい、すぐに消えていくように走り去っていった。

ザワザワザワ……。

「あいつって、もしかして……ノアリンなのか？」

「そうなのか？」

「でも、ノアリンって昔……」

「うるせー！ だまれ、だまれ、だまれー！！」

ハインズがさげふと、シーンとした。

「お前にも、俺とノアリンの関係を話したほうがよさそうだ」

今度は私にむかって静かに話した。

「実は、俺とノアリンは兄弟なんだ。でも、もう一人弟がいる。俺とノアリンは魔法が使えるが、弟のユマッキーは使えないんだ。俺とノアリンでは考え方がちがって、俺は仲間を増やすために魔法を使ったが、あいつは、自分のためだけには使わないって言ったんだ。そこで対立した。こいつらは、俺についてきたけど、ユマッキーだけはノアリンについていった。ここから二人は出てって、俺もあいつらの居場所は知らない。たぶん、今も二人は一緒だと思う」

「そっ、その、ユマッキーって、もしかして、ゆきのこと？」

「まあ、そうなのかもな」

「ちょっとまってよ。おれらのこと忘れてねえだろうな？ お前は俺たちの楽しい人間生活をだいなしにしたんだぞ。今、その借りを返してやる！！」

かなり怒ってる。人間に戻ったみんなが、ハインズにおそいかかろうとしたそのとき！！ ノアリンとユマッキーが基地に入ってきた。と思ったらハインズの前で戦う体勢になった。クロラもハインズの前に行き、戦う体勢になった。私もつられる様にして、戦う体勢になってしまった。

そのとき！！ 目の前が真っ白になった。

「あれ？ こどこ？ クロラがいないよ？」

「おれがおいてきた」

「え？ なんてそんなことしたのよ！」

「クロラは、俺に合図したんだ。ここは俺に任せて先に行けと」

ハインズは、くやしそうに言った。

「今はクロラを信じよう。あの人間たちが立ち去ったら必ず助けに行こう。絶対に」

みんなでそう誓った。せわしい物音がだんだん消えていく。そして人間が立ち去っていった。

「よし、行くぞ」

ゆっくりと足が地面につく。目の前にクロラが倒れている。

「おっ、おい、大丈夫か」

みんなが必死に声をかける。しかしクロラはびくともしない。

「もっ、もしかして死んじゃったのか」

ハインズが言う。

「そっ、そんなことはないよ。クロラは生きてるはずだよ。ハインズ！ クロラの傷治せないの？」

「ごめん……傷を治す魔法は使えないんだ」

ハインズは、申し訳なさそうに言った。

「私、できる！ みんなに会ってないあいだ、ずっと魔法の修行してたの！」

突然言い出したのは、ノアリンだった。ノアリンはクロラのほうに歩き出し、手の平を向けた。

すると、どうだろう。突然透き通る様な青い光がクロラを包み、少しだけ浮かび上がった。

しばらくしてクロラを包んだ光が私たちの目の前に下りてきた。そして光が静かに消えていった、傷はすっかり治って、クロラが目を覚ました。

「あっ、あれ？ なんてお前らここに居るんだ？」

「よかった。クロラごめんね」

「まっ、これくらい朝飯前だぜ」

「そうか？ さっき気絶してたの誰だっけ？」

その時みんながドッと笑った。

「うっ、うるせえ～！！ たまにはなあ……」

「まっ、いっか」

クロラは内心ホッとした。

「ねえ、のん」

「私のはのんじゃないわ。ノアリンよ」

私が話そうとした時、ノアリンが口をはさんだ。

「じゃあ、ノアリン。私を元の人間に姿に戻して」

「そうね。いいわよ戻してあげる」

「！！」

あっさり言われてすごくびっくりした。

「そのかわり……」

「まったく……こんな事になるとは……」

私はノアリンに人間に戻してもらうかわりに、ハインズたちの悩み事を解決させられる事になってしまった。

「じゃあ、まず俺から」

最初に頼んできたのはクロラ。

「俺の悩み事は、いきなりネコにされちまったからよお～。何年も仕事に行ってねえ～から、新しい職業さがしてくれよ」

「大丈夫。ネコになってるあいだは時間経ってねえから。経ってるとしても、二日くらいかな（笑）」

ハインズが言った。

「そっ、そうか？ じゃあ……」

「ないんだったら、無理につくらなくてもいいんじゃない？」

「そっかあ。うんじゃ、俺はないや」

（よっしゃあ〜）

私は一人分減ったのでものすごくうれしい。

「次は俺だ」

ハインズか……。なんか大変そう……。

「おい、今、大変そうだと思っただろ。思ったより簡単だぜ」

ハインズは笑顔で言った。

「ただお前の手に Death ってきざむだけだ。どうだ？ 簡単だろ？ それに、俺達と過ごした証でもあるんだぜ。さあ、手を出すんだ」

おそろおそろ手を出した。すると私の手を赤い光が包んだ。それは一瞬だった。チクッと痛みを感じたらすぐに光が消えた。私はそーっと自分の肉球を見た。そこにきざまっていたのはハインズが言っていた Death という文字だった。

「よし、これでいい」

ハインズが満足そうに言った。

「次は誰？」

「……」

誰も何も言わなかった。

「ノアリンは？」

「ああ、私、私はいいや」

「えっ」

「私はいい。みんなの悩みを解決できなかったのが悩みだったから……」

「そっかあ……」

「ゆき、ゆき？ あっ、ユマッキーはないの？」

「僕は……えっ〜と……そのお……」

「なに？ なんでも言っていていいよ」

私がやさしく声をかけると、ユマッキーは思い切って言ってくれた。

「あの、お姉さんとお兄さんの仲を戻してほしいんです！！」

「……」

「そっかあ……」

私はユマッキーが言ったことは当たり前だと思ふ気持ちと、どうしたらいいのかという気持ちが交錯した。

「それは、お兄さんとお姉さんに直接言った方がいいと思うよ。ハインズ、ノアリン。ユマッキーの話を聞いてあげて」

「分かった。ユマッキー話して」

二人は同時に言った。

「お兄さん、お姉さん、僕の三人で仲良く過ごしませんか？」

「……」

ノアリンとハインズは顔を見合わせて、うなずいた。

「いいよ」

「もう、けんかはだめだよ」

私は、気持ちがなんだか、おちついた気がした。

「さあ、もうみんなの願い事をかなえたことだし、人間に戻してあげる」

「まって。記憶ってなくなるよな？」

「なくしたくない？」

「うん。つらくても、私が体験したことだから」

「そう。分かった。じゃあ、戻すわね」

周りが真っ白になった。

「里桜～、ちゃんと勉強してる？」

「えっ、あ、うん。ちゃんとしてるよ」

手を見て確かめる。

(人間に戻ってる。でも……Death。ハインズにきざまれた言葉だけは)

「ニャー」

「えっ」

ベッドにねそべっているのはのん、ゆきとあれ？ もうーびき。

「ハインズ？」

「ニャ」

「よかった。仲良くなれたんだね」

私は一階に下りていった。

「お母さん、私、受験やめる。私は、私がやりたいことを、自分で決めたいから」

「何言ってるの？ 里桜！ もう受験届出しちゃったわよ！！」

「そんなの、お母さんが勝手に出したんでしょ。私はそんなこと望んでないわよ。お願い」

お母さんはため息をついた。

「分かった。そんなに言うならいいけど、成績、期待してるからね」

「うん、ありがとう。お母さん」

二人は笑顔だった。二階に戻ると、ネコは三びきともほほえんでいるように思えた。

—春—

私は中学生になった。小学校からの友達もいっぱいいて、楽しい毎日を過ごしている。お母さんはやっぱり怒る。でも、私のいいところをいっぱいほめてくれる。きっと、これのおかげ。そっと手の平を見て思う。

知らないうちに文字が変わっていた。

Death が Dearest に……。

Dearest 手の平で変わった文字

Dearest 今でも私は覚えてる
Dearest 私の人生を大きく変えた
Dearest 親愛なる私の人生